うたがたりの研究

ごったがえしの時点

宮原昭夫

ごったがえしの時点

定価　六〇〇円

一九七二年十一月二五日　印刷
一九七二年十二月　五日　発行

著者　宮原昭夫
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区一ッ橋
大阪市北区堂島
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町

印刷　中央精版
製本　大口製本

© AKIO MIYAHARA Printed in Japan
0093—400074—7904

ごったがえしの時点　目次

第一章　幼い廃園……5
第二章　短すぎた朝……86
第三章　青空の中の小さな嵐……181

装幀　田澤茂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ごったがえしの時点

第一章　幼い廃園

一

国民学校（戦時中の小学校）の校舎は屋根といわず壁といわず、褐色と黒の縞模様の迷彩がほどこしてあった。プール脇の土手には、巨大な探照灯が厚いでこぼこのレンズで五月の日射しをはねかえし、まわりに土のうがうず高かった。ちょうど三時間目が終って、各教室の前にそれぞれこんもり盛り上がった防空壕を踏み越して、小学生の群れがいっせいに、白々と明るい運動場へあふれだしてくる。六年の一井級の三時間目は、先生が「教育者一日入隊」に出張で、自習だった。時間が終って退屈から解放されて伊庭葉二がホッとしていると、藤村君が寄ってきて、いきなり葉二の頭を一つ小突き、

「お嬢、なにぐずらぐずらしてんだ。運動場へ出ろ。磯田君からデンタツだ。全員、出るんだ」

とガミガミ言った。葉二は、晴れた日はおもてに出るとまぶしくて頭に突きささるようで、あら

れもなくはだかにされたように居心地わるく、いつも教室の自分の机にうつむいて坐って、想像の中で自分のまわりじゅうに壁をこしらえて、やっとやすらかになるのだった。でも、藤村君に言われると、理由もなく胸がどきどきして急いで席を立った。

教室前に組中のものが集まっていた。笠井君と岩本君が、今度軍港のある町から転校してきた児玉君を、両側からぐいぐい引ったてたり突きとばしたりして連れてきた。その児玉君に、

「おまえ、さっき、磯田君に向って〝おまえ〟って呼んだな」と藤村君が言った。

「上官に向って、おまえ、なんて言っていいのか？　え？　参謀総長陸軍大将だぞ、磯田君は」

「だって……おれ……兵隊ごっこ、入ってないもん」児玉君が青黒い顔になって、どもりどもり懸命に言った。

「だまれ、上官に口返答する気か。六年一井級は全員兵隊だ。国民皆兵だ。おまえはコジンシュギか？」藤村君はさげすむような笑いを浮べて言った。

「軍人精神は規律が第一だ。おまえも大日本帝国臣民なら規律をまもれ」

児玉君はひるんで唇のあたりをだらんとさせて目ばかりおどおどさせていた。藤村君は磯田君に挙手の礼をして、不動の姿勢で、

「閣下、総殴りですか！」

磯田君は悠然と肩を動かして、

「これから児玉の精神を鍛え直すために、組中全員で押しくらまんじゅうをする」と叫んだ。声だけいやにキンキラ声なのだ。校舎の壁の直角になった隅へ、児玉君を突きとばしておいて、皆われさきにと殺到した。おくれると殴られるからだ。全員、無二無三に押しまくりながら、

「押しくらまんじゅう、押されて泣くな」と繰り返し唱和するのだ。外側のものは少し離れたところから弾(はず)みをつけて群れに突き当り、何度もそれを繰り返した。中から苦しげな泣き声が起る。圧力の波でウッ、ウッ、と途切れる泣き声だ。

カーキ色の国防服に戦闘帽、ゲートル巻きの中年の先生が渡り廊下から出て、近づいた。磯田君がどなった。

「精神が入っとらんぞ。もっとがんばれ」

たちまち唱和の声が高まり、泣き声が消され、皆は押しくらまんじゅうをしながら、にこにこ先生に笑ってみせるのだ。先生も顔をほころばせて、

「仲々気合いがかかっとる。良好」とどなってよこして、ガニ股で歩いて行った。伊庭葉二は奥へ入ってしまったので、圧力が強まるたびに息が出来なくなった。足が地から離れ、宙づりになった。汗が身体中にふき出し、ぬるぬる流れた。葉二はだれかのむき出しの皮膚が自分の手や顔

に触れるたびに、叫ぶほど気味わるかった。
「ようし、押しくらまんじゅう、終了」と磯田君。
皆は真赤な顔でふうふう言いながら隅から出てくる。奥の者は上着は濡れてしわだらけで、ボタンが千切れたり靴が脱げてどこかへいってしまったりしている。奥へ入りすぎて泣きながら出てくるものもいた。児玉君はすぐには口が利けないくらい弱っていた。鼻汁が二本とも口のあたりまで垂れてにじみ、涙と汗と鼻汁でべたべたの顔は土気色だ。ボタンが三つ四つ千切れた上着も長ズボンも水をかけてしぼったように、しわだらけだ。口をあけて大きく息をしながら、けれども一生懸命、笑顔を磯田君に向けていた。
児玉君は磯田君の前に直立不動の姿勢で立たされた。
「児玉。おまえは、押しくらまんじゅうされて、どのように思った。言ってみい」と磯田君。
「……児玉は……わるかったと、思います」と児玉君が、とぎれとぎれに言う。
「なにが、わるかったと思うか」と笠井君。
「呼びすてにして、わるかったと」と児玉君は不明瞭な発音で、あえぎながら言う。
「姿勢わるいぞ。キヲツケエッ。中指をズボンの縫い目に。あご引け。……なぜわるかったと思うか」と笠井君がくすくす笑いながら訊く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「上官を、おまえって呼びすてにして、わるかったと思います」
「わるかった、だけか？　思ってるのは。え？　おまえ」と磯田君。
「わるかった、だけか？　精神を入れ直してくださった友達みんなを、有難くないのか？」
「……有難いと思いました」
「有難いと思ったら、なんでありがとうと言わないのか。え？　なんでだ？」
「……ありがとうございました」
「そんな声でみんなに聞えるか？　え？　みんなに尻向けて言っていいのか？」
児玉君はみんなの方へ振り向いて、せいいっぱいのひきつった声で、
「ありがとうございました」と叫んで深くおじぎした。

どういうものか、児玉君のように組中の制裁をうけると、あと、変な人気のようなものが生れる。おまけに児玉君は日常会話にふんだんに兵隊言葉を使うので、みんなはなんとなく一目置きだした。児玉君は、ぼくは、と言う代りに「じぶんは」などと言うのだ。また、授業中など、先生の話がさわりとでも言うべき所へさしかかると、児玉君はさっと手をあげて、感想をのべるのだ。「それもこれも戦地の兵隊さんのおかげです」などと。伊庭葉二はそれを聞いて、えらいと

は思うのだけれど、そのくせ関係もないのに一人で照れて顔を上げられなくなってしまうのだ。

児玉君はあのあとさっそく兵隊ごっこに入り、非常に熱心に磯田君に忠誠をちかった。どうやら進級もことのほか早く、もう下士官になったようだ。

雨あがりの昼休み、児玉君が教室から直接運動場へ通じる戸口から曇った戸外へ出ようとすると、戸口に久保君がよりかかっていた。慢性中耳炎でいつも黒い耳当てをつけている久保君は、雨あがりのおりなどは頭が重いらしく、児玉君が、

「どけ」とどなっても何となくのろのろしていた。児玉君がじれて何気なく久保君を押しのけると、ぬれた石段にすべった久保君は足を踏み外し、防空壕の爆風除けの土手に倒れた。掌や胸が泥だらけになった。児玉君もちょっとびっくりして見ていると、久保君もあんまりだと思ったのか、とっておきの泣き顔をおもむろに浮べはじめた。この辺でいつもは相手が引きさがるのだ。久保君は、いつもは臆病で弱虫だが、いったん泣き出すと、めちゃめちゃにあばれて手がつけられないのだ。というより、いつの頃からかそういう声価が定まってしまって、久保君が泣き出したら相手は引きさがる、という一種のしきたりめいたものが出来あがっていた。転校したての児玉君はそれを知らなかった。見下ろすと頭の地が青白く美しく透けてみえる久保君は、いかにも女手でかまわれつけているといった感じの、甘ったるい動作で、両腕を風車のように廻して児玉

君にぶつかってきた。サイレンのような大げさな泣き声だ。児玉君はびっくりした顔でその両手を受けとめて、そのまま力ずくで押して行って、爆風除けの土手にあお向けに押しつけた。どんなにあばれようがわめこうが、しゃにむに押えつけたまま、珍しそうに久保君の顔をのぞき込んでいるのだ。いつまでたってもそのままなので、久保君はだんだん、あてがはずれてきた。生れてこのかた、泣けばすべてが解決されてきたのに。いつまでも押しつけられたまま、久保君の泣き声はだんだん自信なげに弱々しくなってきた。しまいにとうとう黙ってしまった。児玉君はそんな久保君を引きずり起した。背中じゅう、泥でべたべたの久保君に、往復ビンタを食わせて、児玉君はこともなげに立ち去った。

絶えてないことだが、久保君は先生に言いつけた。よっぽど心外だったのだろう。

午後の授業のはじめに、一井先生が、うなだれた泥だらけの久保君をあとにしたがえて教室へ入ってきた。伊庭葉二はまるで当事者のようにはっとして胸がどきどきしだし、ひざの力が抜けた。担任の一井先生は、非常に若く、非常にやせた先生だ。算数や理科の時間まで、なにかというと生徒みんなを裸にして天突き体操をやらせるが、天を突き上げる、はたちそこそこの小柄な先生の赤裸の腕の細さなどは、見るものに生理的な不快感を与えるくらいだった。骨張った顔は決して笑わず、いつなんどきでも思い詰めたように顔筋を張りつめ、細いまなじりを決していた。

「全員、机をうしろへ寄せよ。可及的すみやかに」と金属的にカン高い声で一井先生が叫んだ。
みんな、一言もしゃべらず、急いで机や椅子を押した。教室の黒板の前に広い空間が出来た。なんだか葉二は泣きたいようなせっぱつまった気がしてきた。
「児玉、ここへ来てみろ」と先生がへんに優しく言った。児玉君はふくれっつらをして、めんどくさそうに出て行った。小粒だがガッチリした身体は、うしろから見るとなおさらずんぐりしてみえた。久保君と児玉君を自分の前に不動の姿勢で並ばせて、先生は、二人に、上着を脱げ、と言った。それから、
「けんかするなら、日本男子らしく堂々と先生の前でやれ！　大和魂を持った忠勇なる大日本帝国の少国民なら、こそこそけんかしたり、けんかに負けて言いつけ口に来たりしないぞ！　これから先生が見ててやるから、ここで二人で徹底的に闘え！　闘って闘って闘い抜け。正しい者は必ず勝つ。けんかに負けるようないくじなしは、万世一系のカミゴイチニンの、しこのみたてとはなれないぞ。おまえらも」とぎろっと六年生達を見渡し、
「けんかしたかったら先生に申し出ろ。先生が立派にけんかさせてやる」
久保君は、はっとうなだれて重苦しく表情をゆがめた。先生が、始めろ、と二人に叫んだ時、久保君は、おびえた泣きべそのような表情を浮べて、ぼんやり児玉君に向き直った。児玉君はぐ

ずぐずせずにとびかかった。久保君は身体をまっすぐにしたまま、うしろに倒れた。木と木のぶつかるような硬い音がした。久保君はギャッというような声を出して、必死にもがくように手足をばたつかせて起き上がろうとした。児玉君が体当りでその上にのしかかり、左手で久保君の柔らかそうな形のいい、血の色が透けて見える耳たぼの下から、女のようにふっくらした頬やあごのあたりの白い皮膚を、肉づきごとわしづかみにしておいて、右手のこぶしをめちゃめちゃに顔中に打ちおろした。そのたびに、ぐしゃっというような湿った打撃音が聞えた。わしづかみにされ、ねじむけられて形相の変った顔中が、みるみる赤くなった。まるで剃り込んだように形のいい弓形の眉が苦しげにしかめられ、切れ長のまつげの濃い目は無理な横目使いで白目が出て不気味だ。一方の、きめの細かい頬が、ささくれ立った床にごりごり押しつけられる。押しゆがめられた唇からよだれが床に流れる。久保君のやせた白い腕が下からさしのべられ、せいいっぱいの力で筋張って、そのきゃしゃな指が、児玉君のメリヤスのシャツの袖口にからみついて、変にゆっくりその袖を下から上にじりじりと引き裂いていった。

久保君がまるでけだもののような悲鳴のような声をあげて、最後の力を振りしぼって児玉君の下から脱け出した。耳当ての黒いひもが千切れ、白いガーゼの塊がすっとび、変に力無い放物線を描いて落ちた。けれどすぐさま児玉君のこぶしがめちゃめちゃに鼻といわず口といわず振りお

ろされる。苦しまぎれに久保君は児玉君の足にしがみつく。児玉君は必死で久保君を何度も蹴りつけ、久保君はあお向けに倒れ、頭が床にごつんと音をたてた。久保君はころげて逃げ、耳当ての黒いひもを頬から長くぶらぶらさせながらヒッヒッと息を吸って起き上がったところを、児玉君が組みつき、そのまま押して行って壁に押しつけ、手当りしだいに殴ったり突いたりした。こぶしに黒いひもがからみつき、耳当てが引き千切れてきても、そのまま、耳当てがからみついたままのこぶしを久保君の顔へ打ちおろしつづけた。耳当てがこぶしのまわりに黒い蛾のように舞った。終始、二人とも一言もしゃべらなかった。久保君は泣くことさえ出来ない。見ているみんなも無言だった。ひっそりした中に、ごつんという音や、ぐしゃっというこぶしの音や、はあはあいう息だけが聞えた。二人のシャツはびりびりになり、顔は汗と涙と床の埃で真黒になり、目のまわりだけ白かった。

「もうよし」と先生が不機嫌に呟いた。児玉君もはあはあ肩で息をしていた。久保君は肩を落して手をだらんとさせ、あえぎながらどんよりした目つきで先生を見ていた。葉二は胸の冷えるようなおそれを感じた。先生にはなにごとも知らせちゃいけない。弱いことは罪なんだから、先生だって助けてくれない。ゆるしてくれない。じぶんは弱いから、心も身体も弱いから、罪人なんだ。大和魂じゃないから、勇士じゃないから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com